第一回普天間移設協議会（〇六年八月二九日）には、島袋名護市長も稲嶺沖縄県知事も欠席する可能性があった。協議会出席のために上京した島袋市長は、額賀防衛庁長官が北部振興事業を普天間移設作業の「出来高払い」で実施する意向を協議会で表明することを警戒して、上京しても防衛庁との接触を避け協議会出席を躊躇していた。稲嶺知事も「それなら私も出席しない」と話していた。小池百合子沖縄担当相の策で二人は結局閣僚を一時間待たせて出席したが、このことは、〇六年四月の「基本合意」の二の舞を島袋市長が恐れ、北部振興事業というアメとそれを基地建設とリンクさせるムチで日本政府が辺野古基地建設を推進してきたことを示している。

本書は、守屋武昌元防衛事務次官と組んで普天間移設を推進してきた元那覇防衛施設局長佐藤勉が在任中の実務経過をまとめた備忘録を沖縄タイムズが入手したことをきっかけに、〇八年四月から九月まで計五一回にわたって「沖縄タイムズ」に連載した記事をまとめた本で、前述のような裏話が満載だ。防衛庁（省）と県と市と北部自治体（東村など）とがどのように極秘の動きを経て現在にいたっているか、日本政府がアメとムチを見せながらどのように県や市や北部地域をたぶらかせてきたか、特に守屋が如何に強引に辺野古基地建設を推進してきたか、があぶり出されている。

強引な現況調査、掃海母艦「ぶんご」の出動、県が受取拒否するアセス方法書提出、方法書の大幅追記、などなど省に昇格してからの二〇〇六年の防衛省の動きは、辺野古実で省交渉していても、あまりに強引でちぐはぐで省の担当者もじくじたる思いで仕事をしているように見えたが、北部振興策で十年間に約一千億円も使いながら普天間移設がなかなか進まないことに守屋が焦ったからであった。裏話を本書で読めば、なるほどやはりそうだったのか、と納得させられる。〇六年の沖縄知事選において、官僚である佐藤が中央の自民党関係者から地元業者のリストを渡されて守屋に報告しながら県内の約十社を訪ね言いわけまで用意していたことや、辺野古現地の阻止行動の影響にも触れられている。

本書には、守屋や佐藤や額賀ほかの「プレイヤー」の写真と、普天間移設をめぐる略年表が冒頭に提示され、SACO合意、軍民共用と一五年使用期限、V字形案、など計五五項目にわたる注釈が末尾に付けられ、かつ米軍再編中間報告（日米同盟：未来のための変革と再編）、米軍再編最終報告（再編実施のための日米のロードマップ）や一九九九年の閣議決定と最終報告に関する閣議決定（〇六年五月）も資料として収録されており、辺野古基地建設阻止行動のためには必携の書である。

本書から、阻止行動のための有効な策を得ることができよう。

メディア紹介

『「アメとムチ」の構図——普天間移設の内幕』

渡辺豪　著

2008年10月／沖縄タイムズ社発行／本体1000円

木村雅夫（反安保実）